教科書文庫
4
760
52-1902
0130449460

女學唱歌

30483
教科書文庫
34
760
52-1902
01304
49460

教科書文庫
4
760
52-1902
0130449460

中央図書館

広島大学図書
0130449460

明治三十五年三月十日
文部省檢定濟

山田源一郎編

女學唱歌

（第壹集）

合資會社共益商社樂器店藏版

広島大学図書
0130449460

序

音樂を普通教育の一要素と認め唱歌を學校の課程に加へられしはつひ近き頃の事と思ひしにはや二十餘りの星霜を經ぬ其間幾多の變遷なきにあらざりしが特に當時女學生の唱歌には古調の律旋もてものせる歌曲多かりけるをいつしか新調の歌風に移れるはいといちじるき現象にあらずとやいはんこはもと時勢の然らしむる所とはいへ斯道の爲に盡されたる人々の力によれること多きは云ふまでもなかるべし此度山田君のものせられたる唱歌集はことさらに西洋諸名家の作曲のみを集めまゝ君が作曲をも交へられたりと聞く斯くてこそ教育の理法を唱歌に應用し易より難に入り簡より繁に進むの順序を誤らず將來一般女學生の音樂の趣味をも一

變して優秀の氣品を養成するを得ん山田君は最も早く新音樂の門に入りたる人にして久しく東京音樂學校にまた女子高等師範學校に樂鞭を執れる人なれば其選曲の能く當を得て音樂教育に裨益を與へんこと余の信じて疑はざる所なり

明治三十三年七月二十八日酒勾郵絃海書屋にて

伊澤修二しるす

緒言

一本書ハ專ラ女子師範學校高等女學校其他之ト同一程度ノ女學校教科用トシテ適當ナル材料ヲ供給スル目的ヲ以テ編纂シタルモノナリ

一本書中ノ歌詞ハ總テ本邦名家ノ手ニ成リ其樂譜ハ編者ノ作ヲ除クノ外悉ク泰西名家ノ作ニ係ルモノ若クハ國風曲(フォルクスリード)等ニシテ歌想樂想共ニ主トシテ本邦女子ノ性情ニ恰好ナルモノヲ選擇セリ

一本書中ノ歌曲ハ之ヲ單音複音及三重音ノ三種ニ類別シ各種ニ就キ畧ボ難易ノ順序ニ依リテ配當セリ但シ實際教授上ノ便宜ニ依リ多少ノ異動ヲ行フハ教授者ノ任意ナリトス

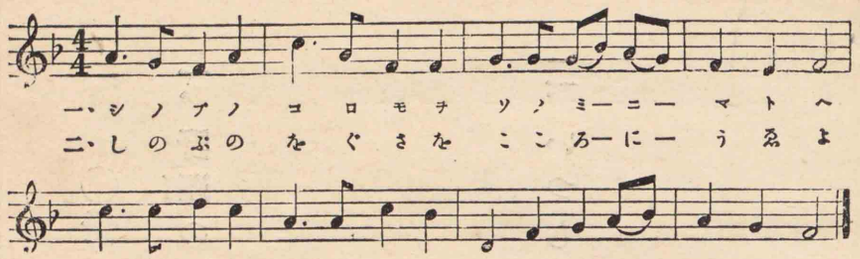
明治三十三年八月　編者誌

女學唱歌第一集

目次

一忍ぶのころも
一鶯告春
一歡迎の歌
一雪
一つみくさ
一愛國
一園生の春
一四季の詠
一小鳥
一卒業式の歌
一落花
一川のながれ
一つれ〴〵
一富貴の花
一女のかゞみ
一たのし我屋
一夏の曙
一潮干狩
一隅田川
一紅葉狩

一新年
一祝歌
一櫻狩
一たそがれ
一懷友
一集會
一旅の暮
一秋漁
一琴の音
一秋の夜
附錄
輪唱
一寫眞
一花紅葉
一兄弟
一夜學
一四季のあはれ
以上



○忍ぶのころも

三輪義方作歌
山田源一郎作曲

一、しのぶのころもを、
その身にまとへ。
錦にまさるは、
しのぶのころも。

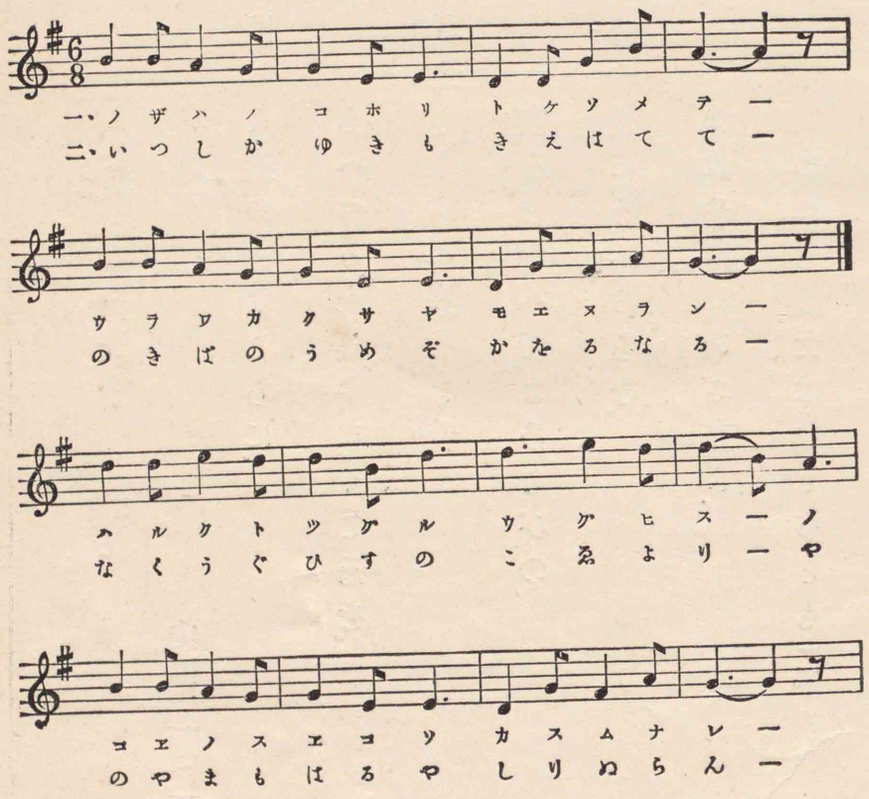
二、忍ぶのをぐさを、
こゝろにうるよ。
花にもまさるは、
忍ぶの小艸。

○鶯告春

一、野澤の氷、とけそめて。
　うら若草や、もゑぬらん。
　春來と告る、うぐひすの。
　こゑの末こそ、かすむなれ。

二、いつしか雪も、消えはてゝ。
　軒端の梅ぞ、かをるなる。
　なくうぐひすの、聲よりや。
　野山も春や、知りぬらん。

鶯告春

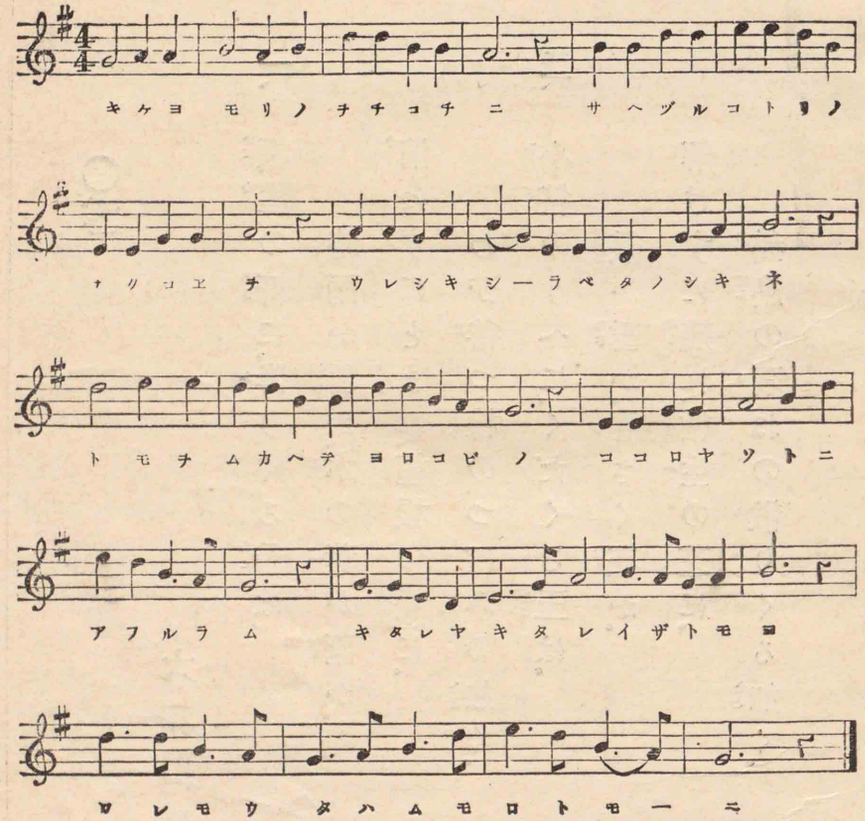


○歡迎の歌

山田源一郎作曲

聞けよ森の、をちこちに。
さへづる、小鳥の、なくこゑを。
嬉しきしらべ、樂しき音。
友をむかへて、よろこびの。
心や外に、あふるらむ。
來れや來れ、いざ友よ。
われもうたはむ、もろともに。

歡迎の歌



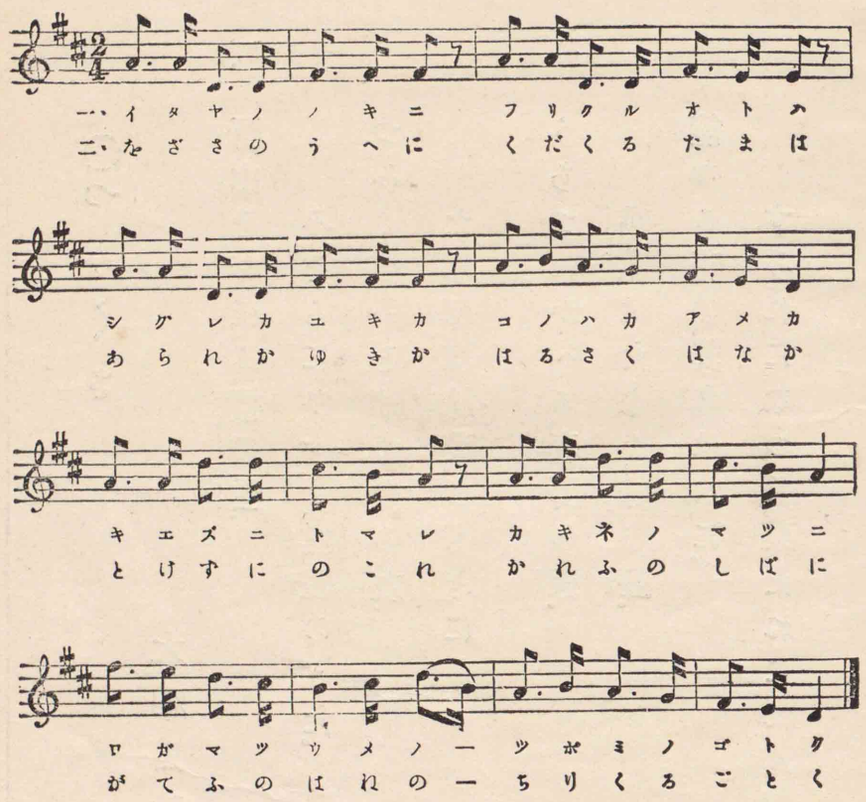
○雪

大和田建樹作歌

一、板屋の軒に、降りくる音は。
　時雨か雪か、木の葉か雨か。
　消ねずにとまれ、桓根の松に。
　わが待つ梅の、つぼみの如く。

二、小笹のうへに、くだくる玉は。
　霰か雪か、春さく花か。
　解けずに殘れ、枯生の芝に、
　鵝鳥の羽ねの散りくる如く。

雪



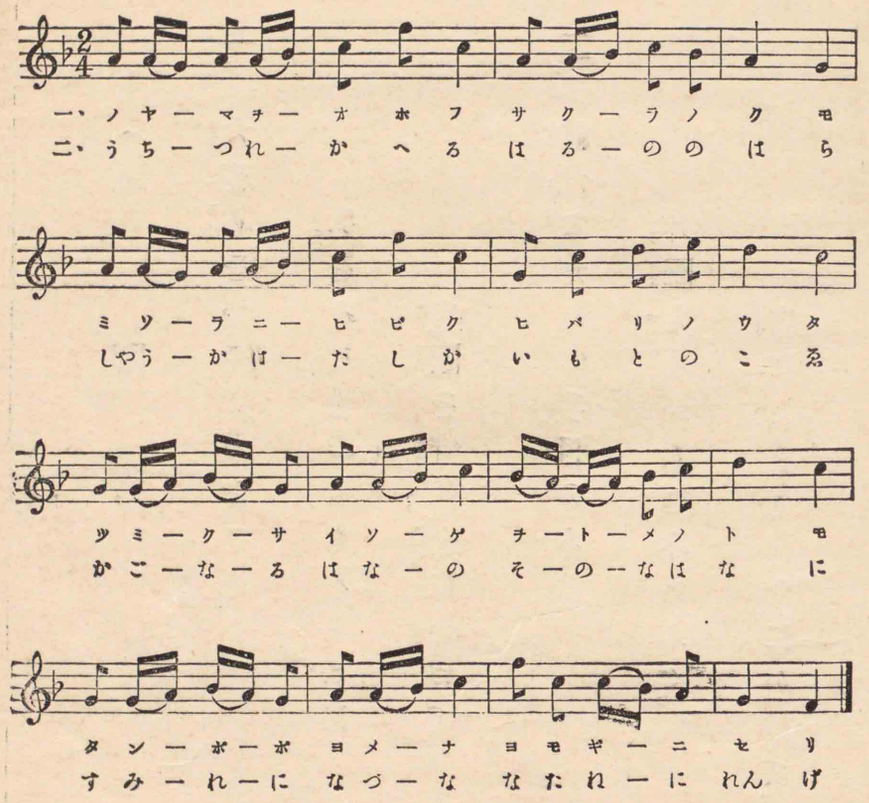
○つみくさ

大和田建樹作歌

一、野山をおほふ、櫻の雲。
　みそらにひゞく、雲雀のうた。
　つみくさいそげ、少女の友。
　たんぽぽ嫁菜、よもぎに芹。

二、うちつれかへる、春野の原。
　唱歌はたしか、妹の聲。
　籠なる花の、其名はなに。
　すみれになづな、菜たねにれんげ。

つみくさ

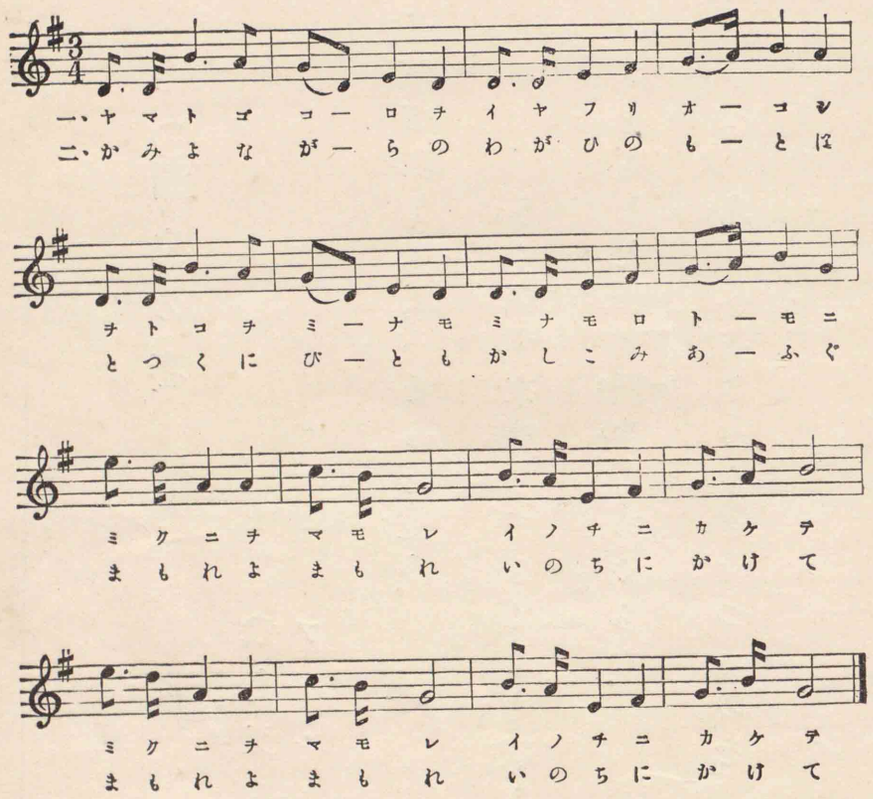


○愛　國

一、大和心を、いやふりおこし。
　男をみなも、みなもろともに。
　皇國を守れ、命にかけて。

二、神代ながらの、我日の本は。
　外國人も、かしこみあふぐ。
　守れよまもれ、命にかけて。

愛　國

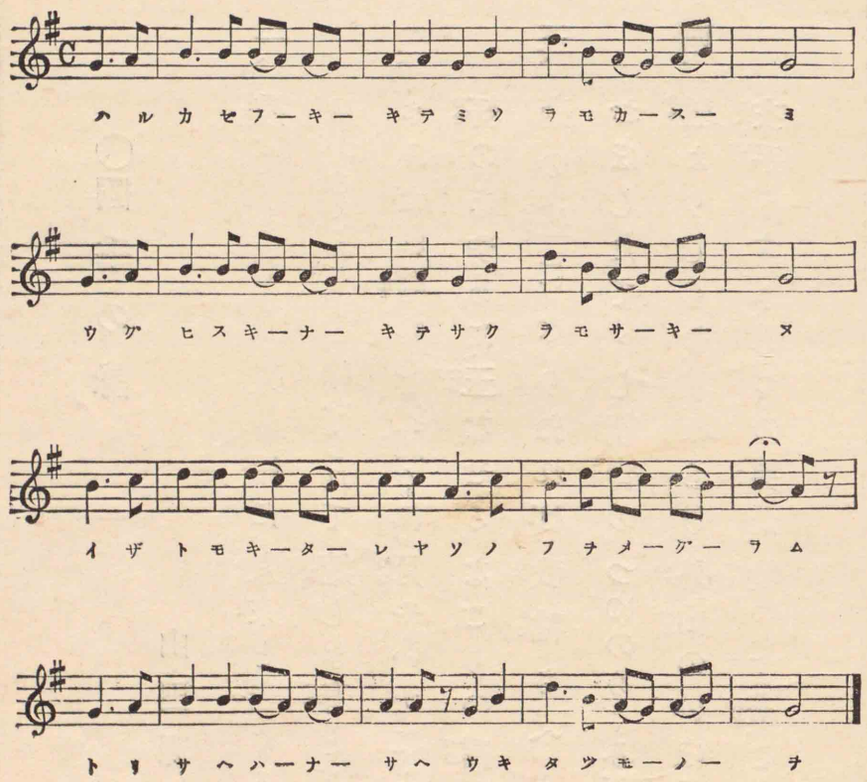


○園生の春

武島又次郎作歌
アルン作曲

春かぜ吹き來て、みそらも霞み。
うぐひす來鳴きて、さくらも咲きぬ。
いざともきたれや、園生をめぐらむ。
鳥さへ花さへ、うきたつものを。

園生の春



○四季の詠

山田源一郎作曲

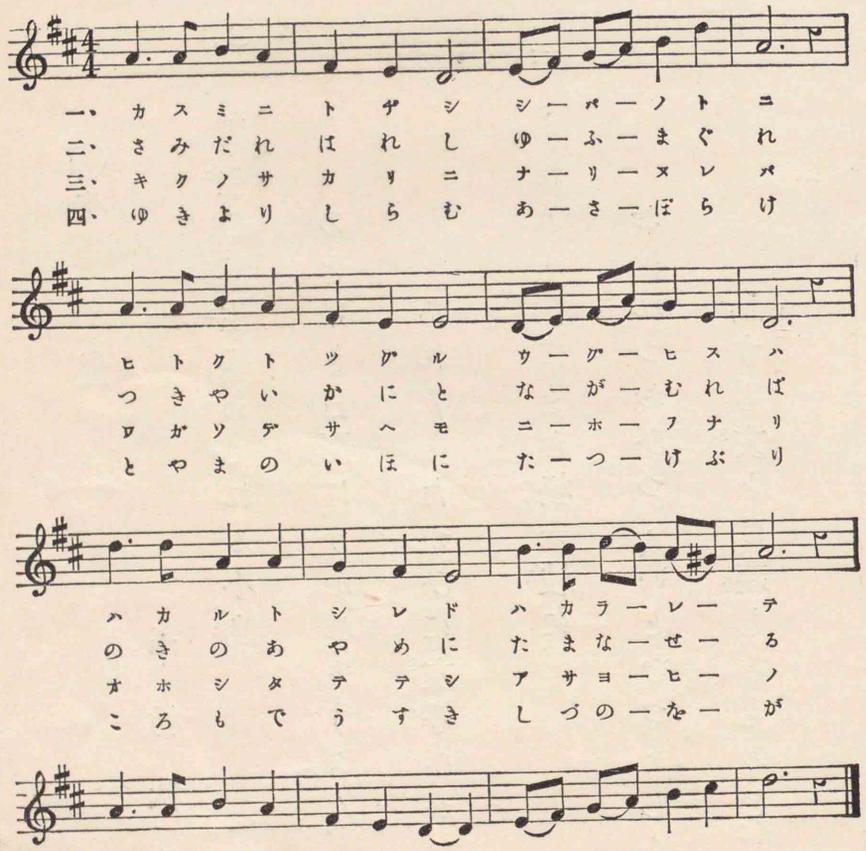
一、霞にとぢし、柴の戸に。人來と告ぐる、うぐひすは。
はかるとしれど、はかられて。嬉しき春とぞ、うたひける。

二、さみだれ晴れし、夕間ぐれ。月やいかにと、ながむれば。
軒のあやめに、玉なせる。なごりの露も、かをるなり。

三、菊の盛に、なりぬれば。我袖さへも、匂ふなり。
おほしたてゝし、朝宵の。つゆのめぐみぞ、知られける。

四、雪よりしらむ、朝ぼらけ。外山のいほに、たつけぶり。
衣手うすき、しづの男が。世わたる業こそ、あはれなれ。

四季の詠



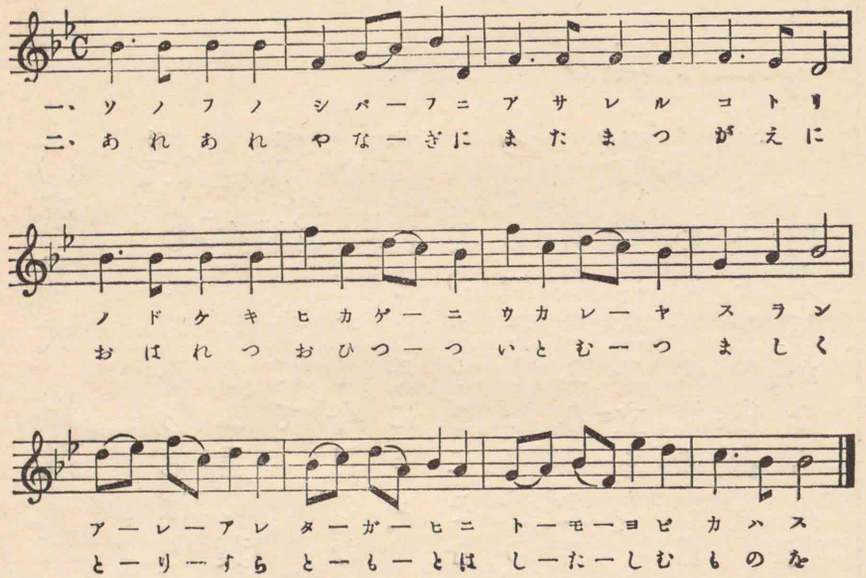
○小鳥

中村秋香作歌

一、園生の芝生に、あされる小鳥。
のどけき日影に、うかれやすらん。
あれ〳〵たがひに、友呼びかはす。』

二、あれ〳〵柳に、また松が枝に。
おはれつおひつゝ、いとむつましく。
鳥すら友とは、親しむものを。』

小鳥



○卒業式の歌

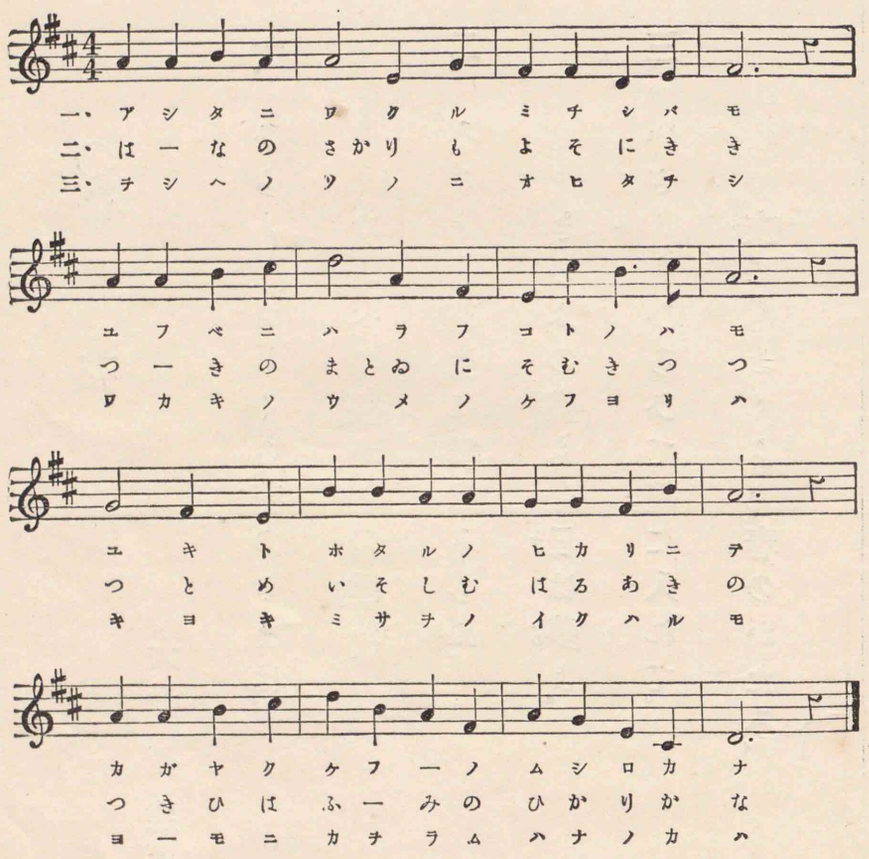
山田源一郎作曲

一、朝にわくる、みちしばも。
　夕にはらふ、言の葉も。
　雪と螢の、光にて。
　かゞやく今日の、むしろかな。

二、花の盛も、よそにきゝ。
　月のまとゐに、そむきつゝ。
　つとめいそしむ、春秋の。
　月日はふみの、光かな。

三、教の園に、生ひ立ちし。
　わかきの梅の、今日よりは。
　清きみさをの、幾春も。
　四方にかをらん、花の香は。

卒業式の歌

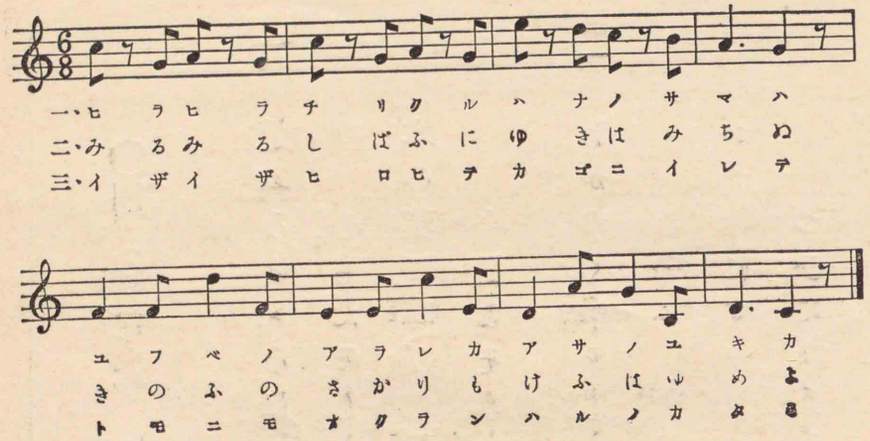


○落　花

大和田建樹作歌

一、ひら〳〵ちりくる、花のさまは。
　ゆふべの霰か、朝の雪か。
二、みる〳〵芝生に、雪はみちぬ。
　きのふの盛も、今日は夢よ。
三、いざ〳〵ひろひて、籠に入れて。
　友にもおくらん、春のかたみ。

落　花



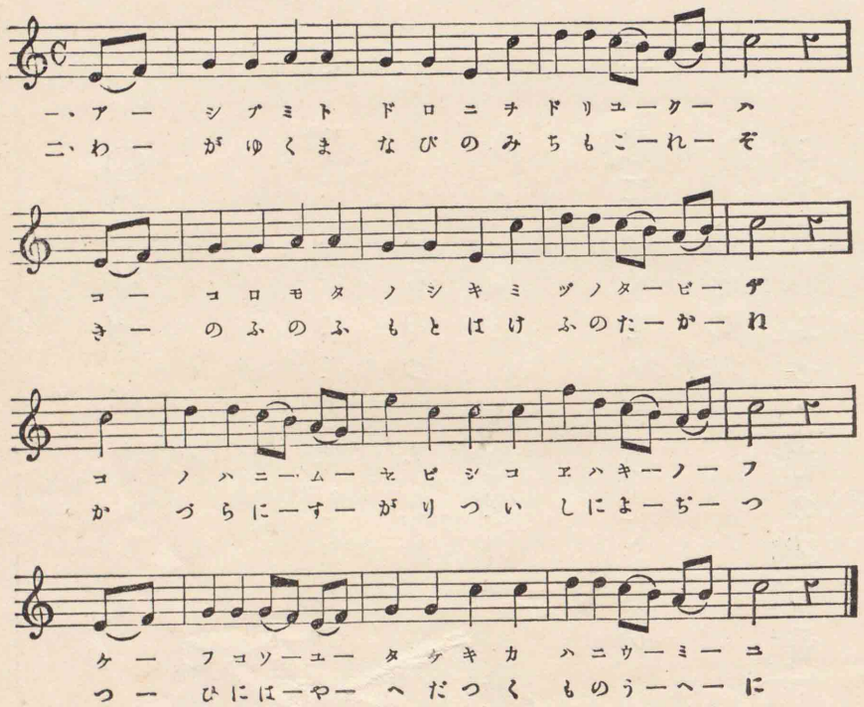
○川のながれ

大和田建樹作歌

一、足ぶみとゞろに、躍りゆくは。
　心もたのしき、水の旅路。
　木の葉に咽びし、聲は昨日。
　今日こそゆたけき、河に海に。

二、わがゆく學の、道もこれぞ。
　きのふの麓は、今日の高嶺。
　かづらにすがりつ、石によぢつ。
　つひには八重だつ、雲の上に。

川のながれ



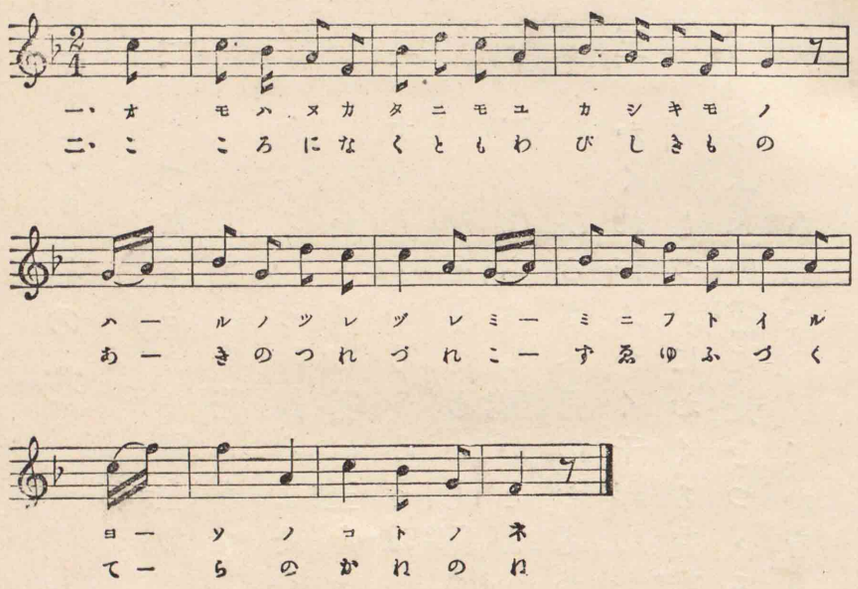
○つれづれ

旗野十一郎作歌
ボーマン作曲

一、思はぬかたにも、懷しきもの。
　はるのつれづれ。
　みゝにふといる、他家の琴の音。』

二、意になくとも、わびしきもの。
　あきの徒然。
　こずゑゆふづく、寺の鐘の音。』

つれづれ



○富貴の花

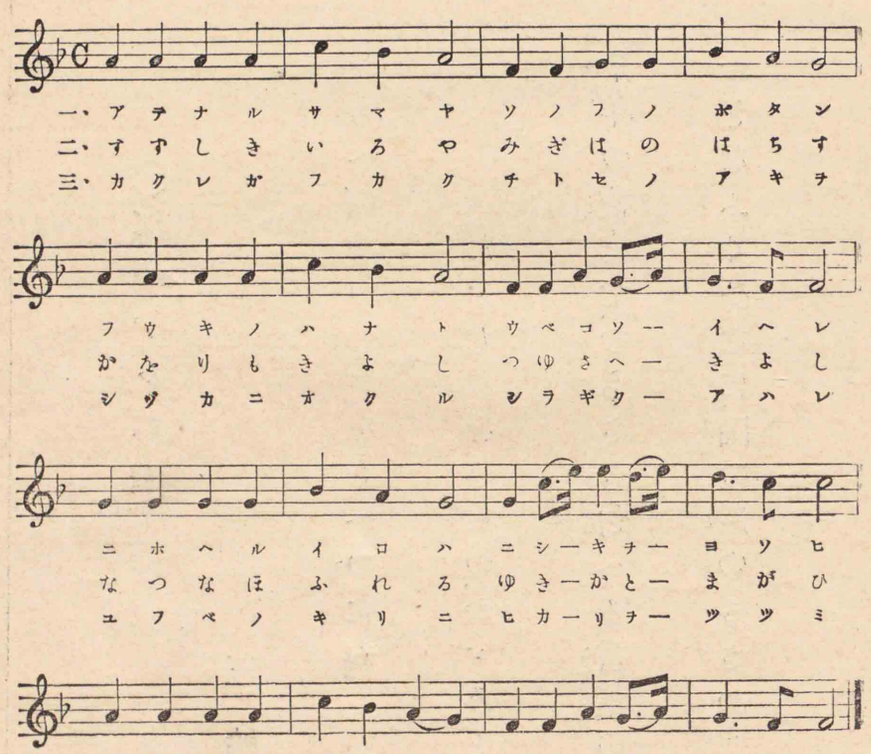
三輪　義　方作歌

一、あてなるさまや、園生のぼたん。
　ふうきの花と、うべごそいへれ。
　匂へるいろは、錦をよそひ。
　かゝれる露は、玉をぞかざる。

二、すゞしきいろや、みぎはのはちす。
　かをりもきよし、露さへきよし。
　夏なほふれる、雪かとまがひ。
　ひるさへ月の、おもかげうかぶ。

三、かくれがふかく千年の秋を。
　しづかにおくる、白菊あはれ。
　ゆふべの霧に、光をつゝみ。
　あしたの風に、かをりをもらす。

富貴の花

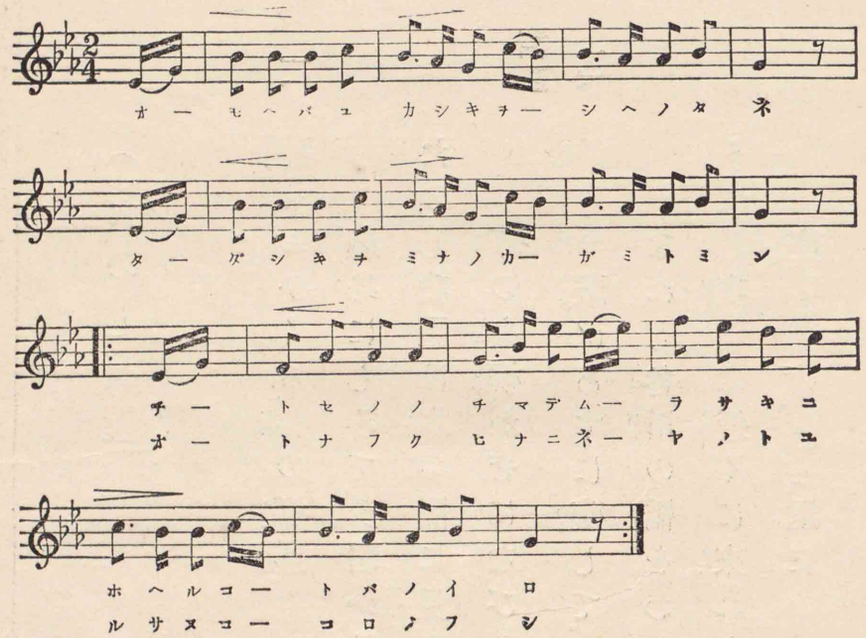


○女のかゞみ（紫式部）

三輪義方作歌

おもへばゆかしき、をしへのたね。
たゞしきをみなの、かゞみとみん。
千年の後まで、むらさき匂へる、言葉のいろ、
おとなふくひなに、閨の戸ゆるさぬ、こゝろのふし。

女のかがみ



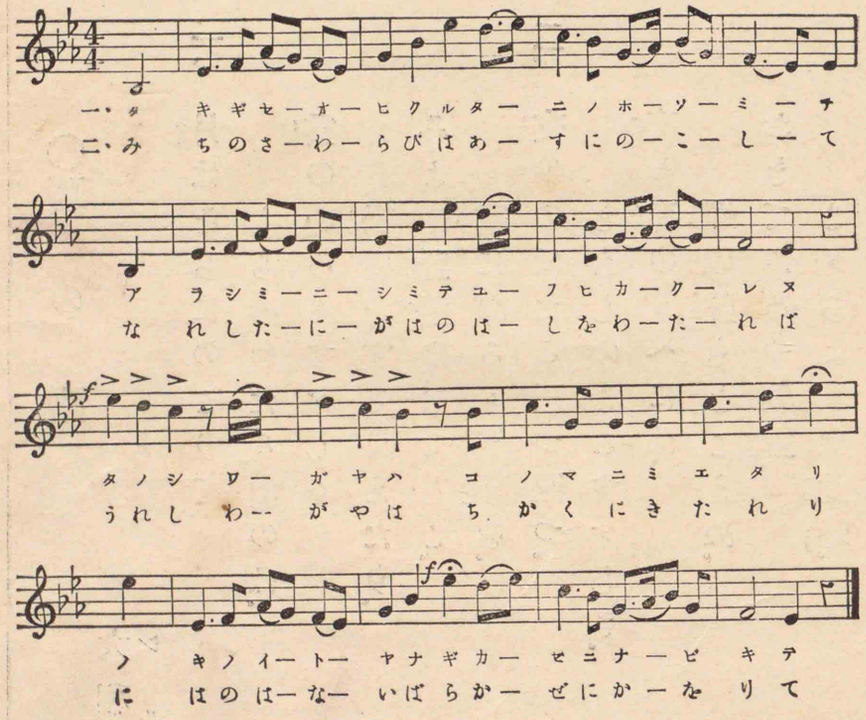
○たのし我屋

大和田建樹作歌

一、
薪せおひくる、谷の細道。
嵐身にしみて、夕日かくれぬ。
たのし我屋は、木の間に見えたり。
軒の糸柳、かぜになびきて。

二、
道の早蕨は、あすに殘して。
なれし谷川の、橋をわたれば。
うれし我屋は近くに來れり。
庭の花いばら、風にかをりて。

たのし我屋



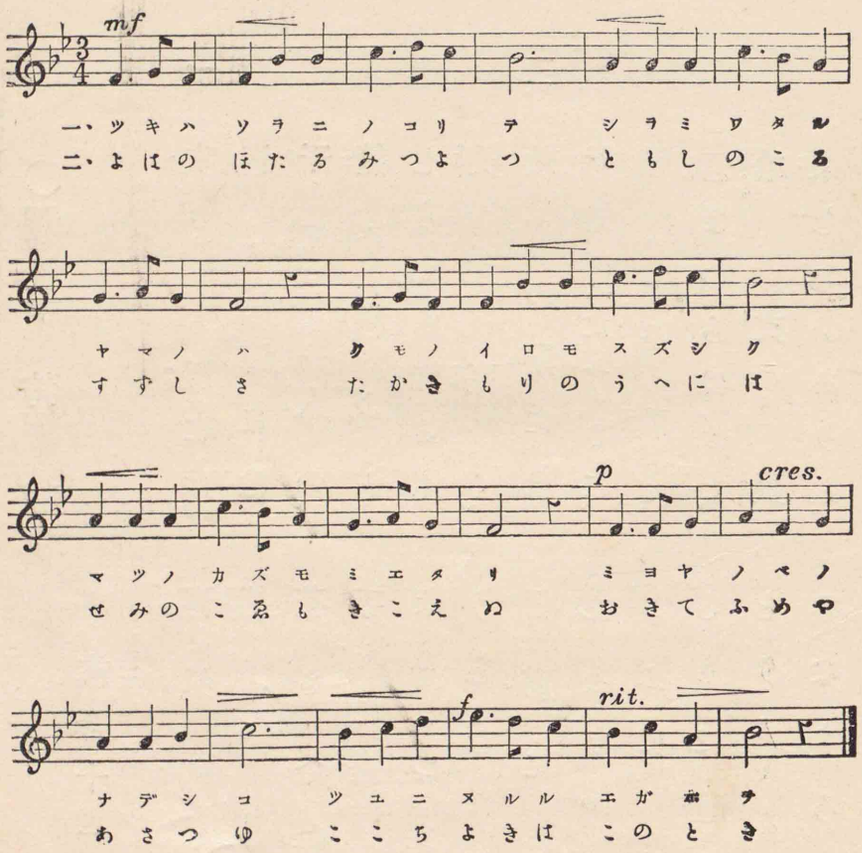
○夏の曙

大和田建樹作歌
シルヘル作曲

一、月はそらにのこりて、
　しらみわたる山のは。
　雲のいろもすゞしく、
　松のかずも見えたり。
　みよや野邊のなでしこ、
　露にぬるゝ笑顔を。

二、夜半のほたる三つ四つ、
　ともしのこるすゞしさ。
　高き森のうへには、
　蟬の聲もきこえぬ。
　おきてふめや朝露、
　こゝちよきは此時。

夏の曙



○潮干狩

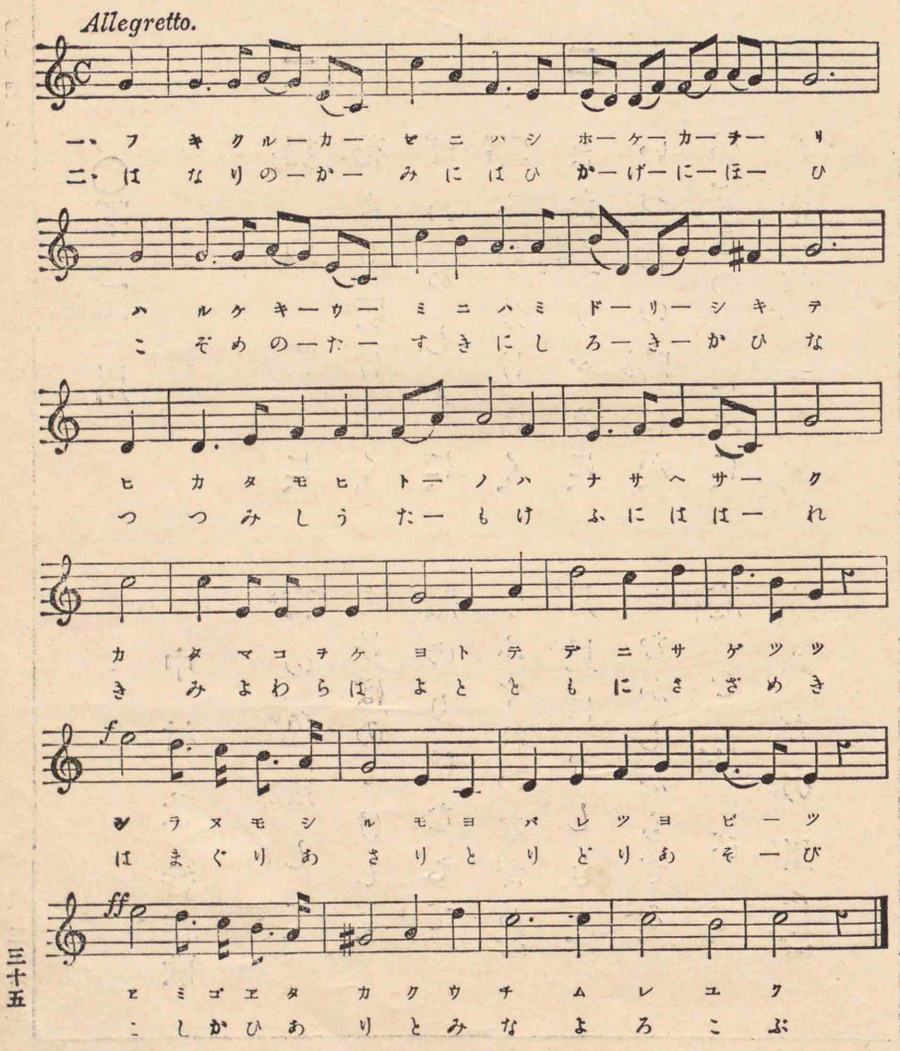
旗野十一郎作歌
エンゲル作曲

一、吹きくる風には、潮氣かをり。
遙けき海には、綠しきて。
干潟も人の、花さへ咲く。」
籠小桶よと、手々に提げつゝ。
しらぬも知るも、よばれつよびつ、
笑聲高く、うちむれ行く。』

二、放下の髪には、日影にほひ。
緋染のたすきに、しろきかひな。
愼秘し唱歌も、けふには公然。」
君よわらはよと、ともに喧騒き。
蛤文貝、とりぐあそび。
來しかひありと、みなよろこぶ。』

潮干狩

Allegretto.

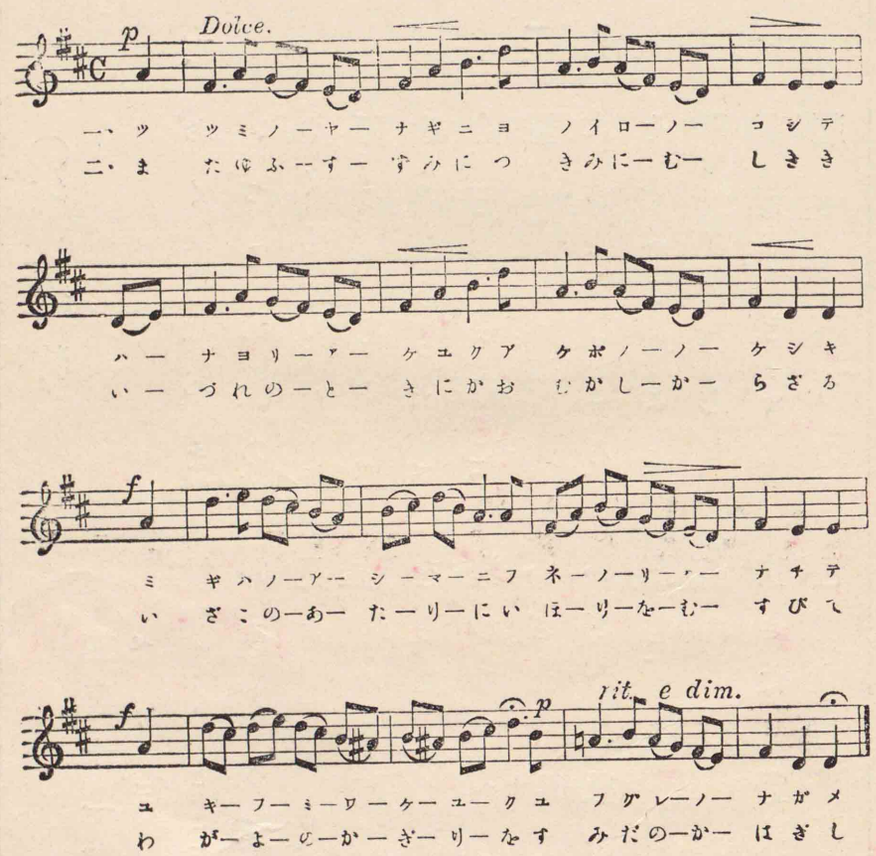


○隅田川

中村秋香作歌

一、堤の柳に、夜の色残して。
花より明けゆく、あけぼのゝけしき。
汀のあしまに、船のりはなちて。
雪ふみ分けゆく、ゆふぐれのながめ。』
二、また夕すゞみに、月見にむしきゝ。
いづれの時にか、おむかしからざる。
いざこのあたりに、庵を結びて。
わが世の限りを、すみだの川岸。』

隅田川

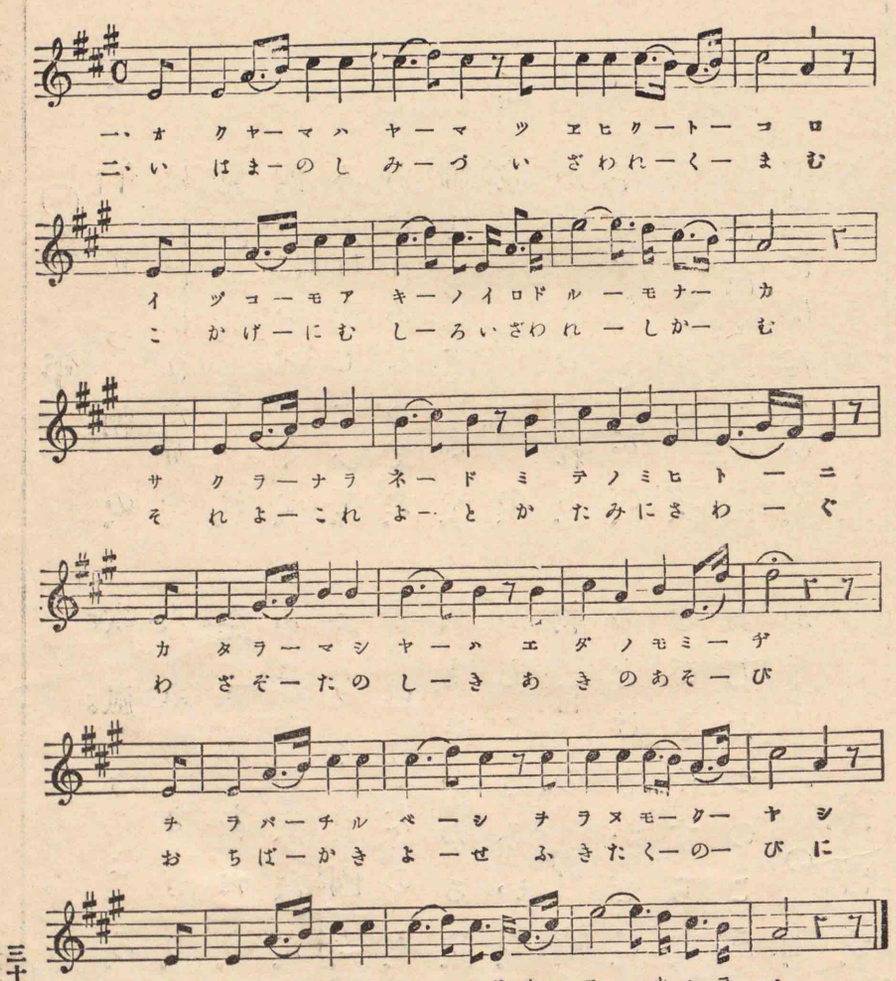


○紅葉狩

旗野十一郎作歌
ベリニー作曲

一、おく山はやま、
いづこも秋の、
さくらなれど、
語らましやは、
をらばちるべし、
今日は手巾に、
二、巖間の清水、
木蔭にむしろ、
それよこれよと、
所爲ぞたのしき、
落葉かきよせ、
顔ももみぢの、
枝ひくところ。
いろどる最中。
見てのみ人に。
枝の紅葉。
をらぬもくやし。
染めて歸へらむ。』
いざわれ酌まむ。
いざわれ敷かむ。
互にさわぐ。
秋の遊び。
吹きたく野火に。
色ぞ匂へる。』

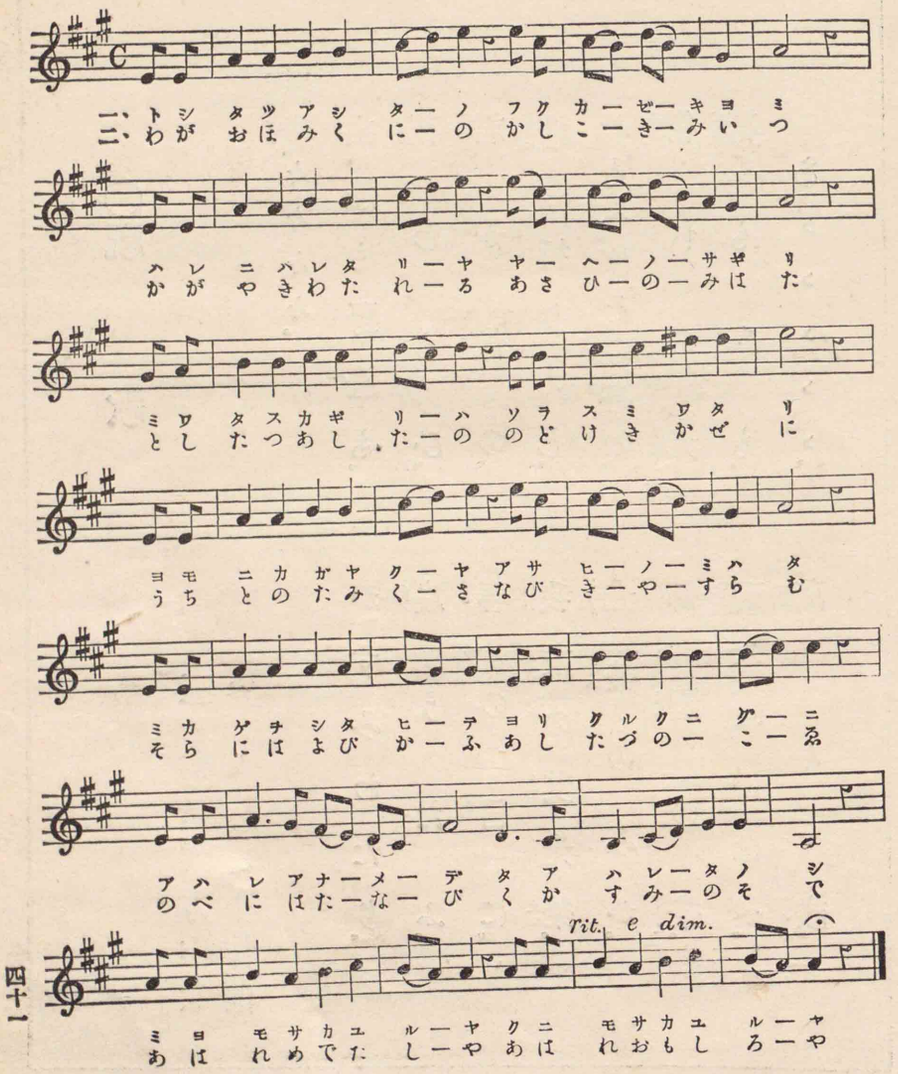
紅葉狩



○新年

一、年立つ朝の、吹風きよみ。
はれにはれたりや、八重のさぎり。
見渡すかぎりは、空すみわたり。
四方にかゞやくや、あさひのみはた。
みかげをしたひて、よりくる國々。
あはれあなめでた、あはれたのし。
御代も榮ゆるや。國もさかゆるや。
二、我大御國の、かしこきみいつ。
かゞやきわたれる、朝日の御旗。
年立あしたの、のどけきかぜに。
内外の民草、なびきやすらむ。
空にはよびかふ、あしたづのこゑ。
野邊にはたなびく、かすみの袖。
あはれめでたしや。あはれ面白や。

新年

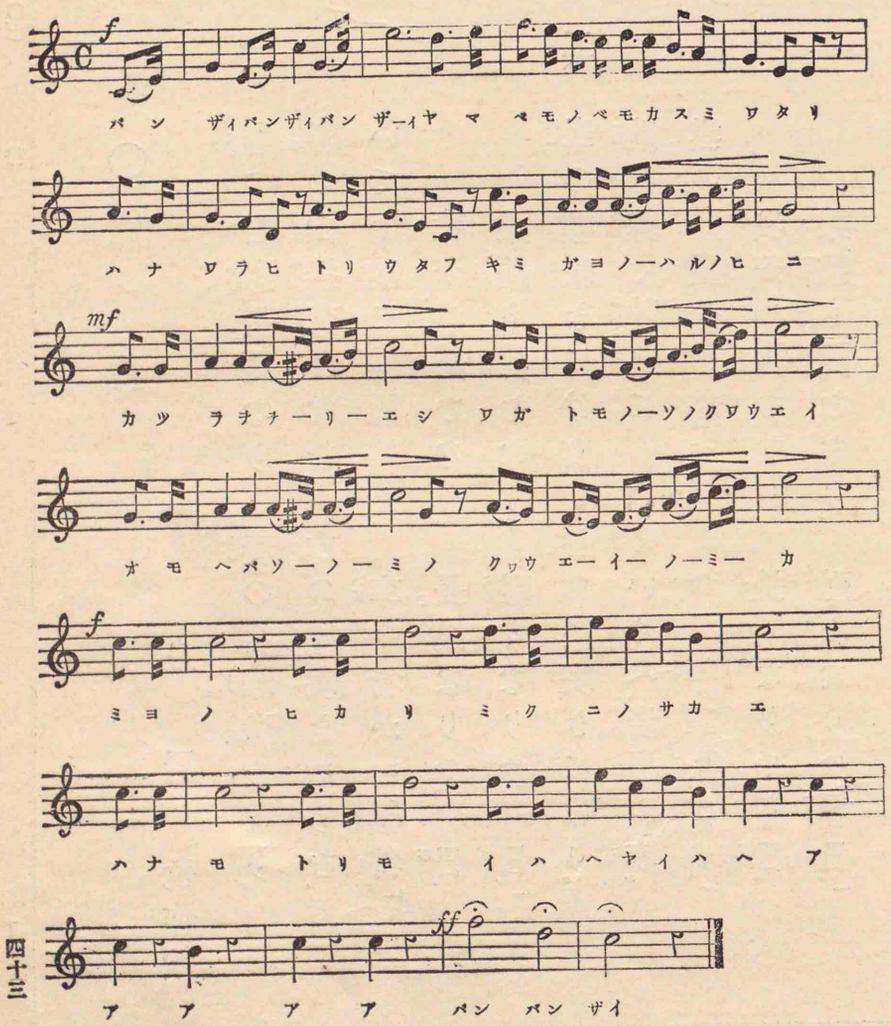


○祝歌

三輪義方作歌
ベリニー作曲

萬歳、々々々々。
山邊も野邊も、かすみわたり。
花わらひ、鳥うたふ。
君が代の、春の日に。
桂を折りえし、我友の其光榮。
おもへばその身の、光榮のみか。
御代の光、御國の榮。
花も鳥も、祝へやいはへ。
あゝゝゝゝゝ、萬々歳。

祝歌



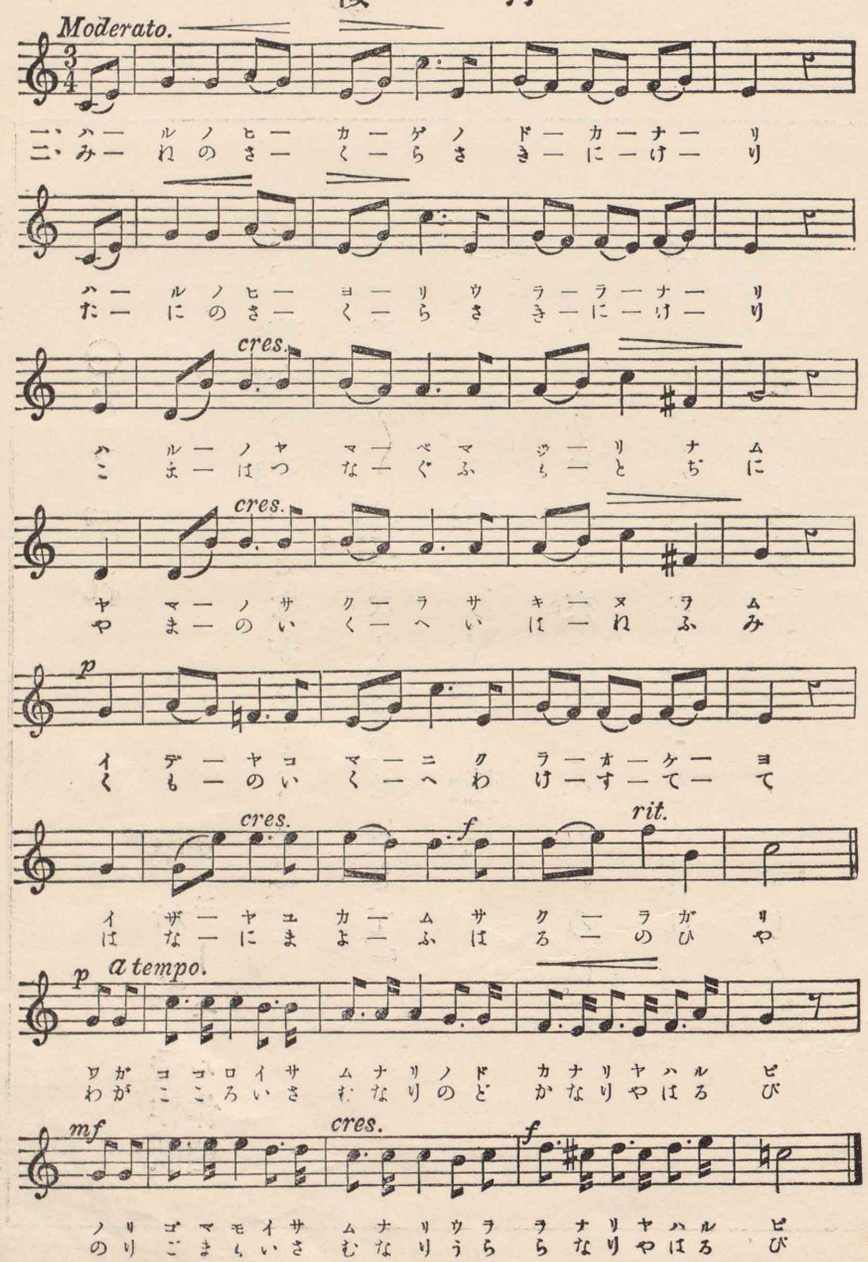
○櫻狩

鳥居忱作歌

一、春の日影、長閑なり。春の日和、融々なり。
春の山邊、交りなむ。山の櫻、咲きぬらむ。
いでや駒に、鞍置けよ。率や行かむ、櫻狩。」
我が心、勇むなり。長閑なりや、春日。
乘駒も、勇むなり。融々なりや、春日。」

二、峯の櫻、咲きにけり。谷の櫻、咲きにけり。
駒は繫ぐ、麓路に。山のいくへ、岩根ふみ。
雲の幾重、分け捨てゝ。花に迷ふ、春の日や。」
我が心、勇むなり。長閑なりや、春日。
乘駒も、勇むなり。融々なりや、春日。」

櫻狩



○たそがれ

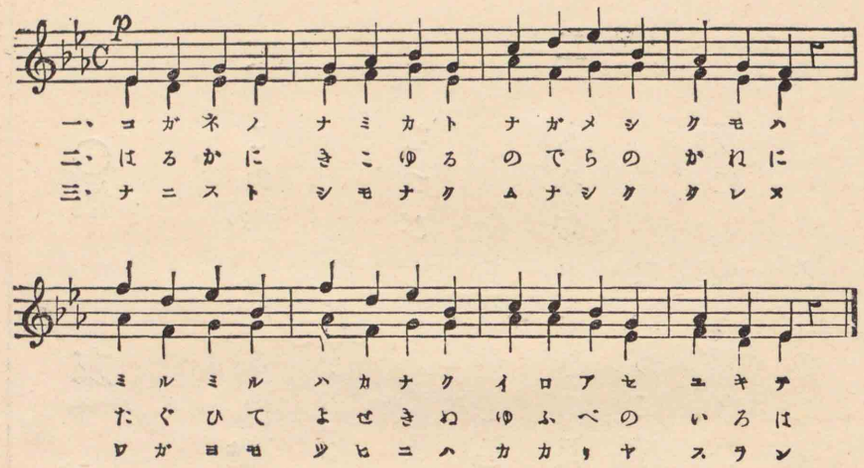
中村秋香作歌
ウエーベル作曲

一、黄金の波かと。ながめしくもは。
見る〳〵はかなく、色あせゆきて。』

二、はるかに聞ゆる、野寺の鐘に。
たぐひてよせ來ぬ、ゆふべのいろは。』

三、なにすとしもなく、むなしく暮れぬ。
わがよもつひには、かゝりやすらん。』

たそがれ



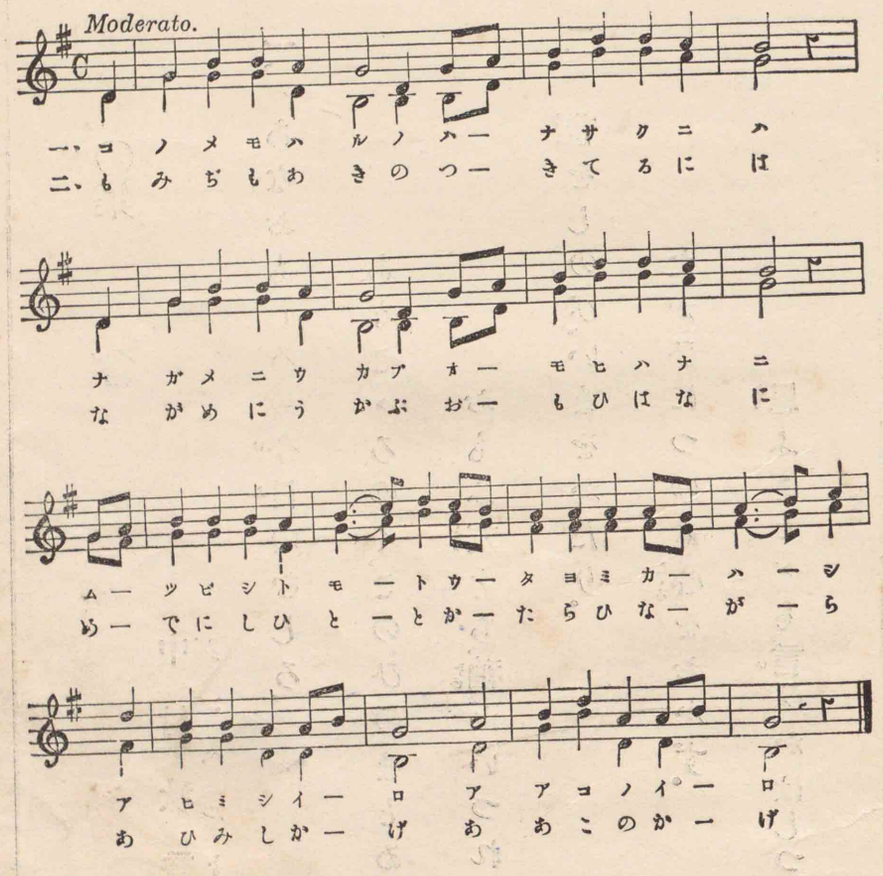
○懷　友

旗野十一郎作歌
シルヘル作曲

一、この芽もはるの、花さくには。
　眺にうかぶ、おもひはなに。
　むつびし友と、歌よみかはし。
　あひ見し色。あゝこのいろ。』

二、もみぢもあきの、月照る庭。
　ながめに浮ぶ、おもひはなに。
　愛にし人と、語合ひながら。
　あひみし影。あゝこのかげ。』

懷　友



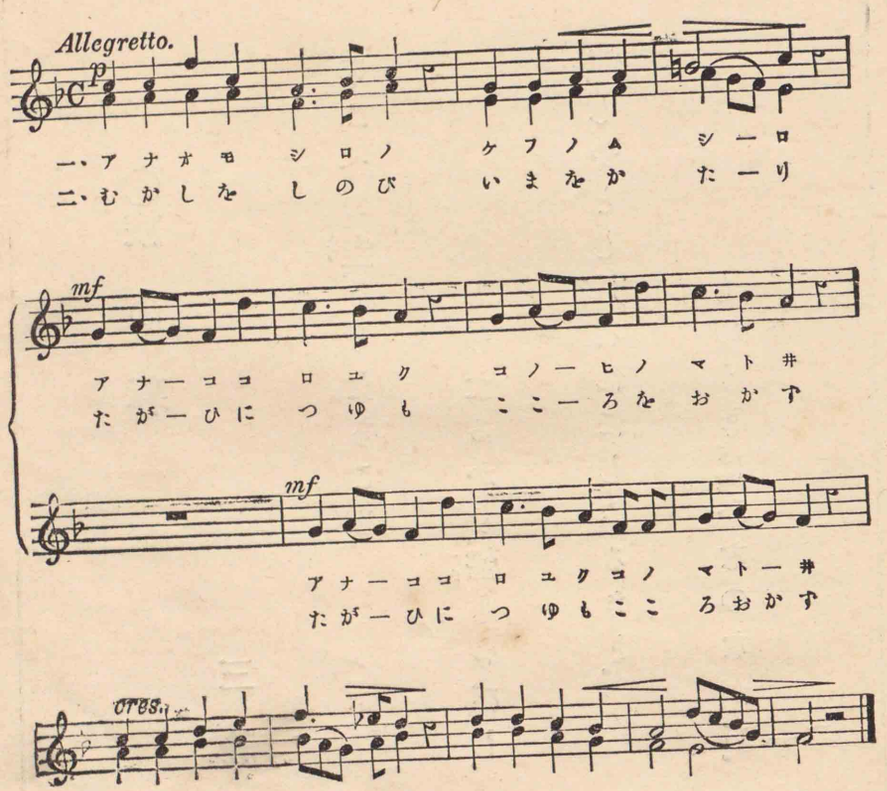
○集　會

中村秋香作歌
グンベルト作曲

一、あなおもしろの、今日のむしろ。
　　あなこゝろゆく、このひのまとゐ。
　　おもふ友どち、袖かいつれて。」

二、昔をしのび、いまをかたり。
　　たがひにつゆも、心をおかず。
　　思ふことゞも、言ひかはしつゝ。」

集　會

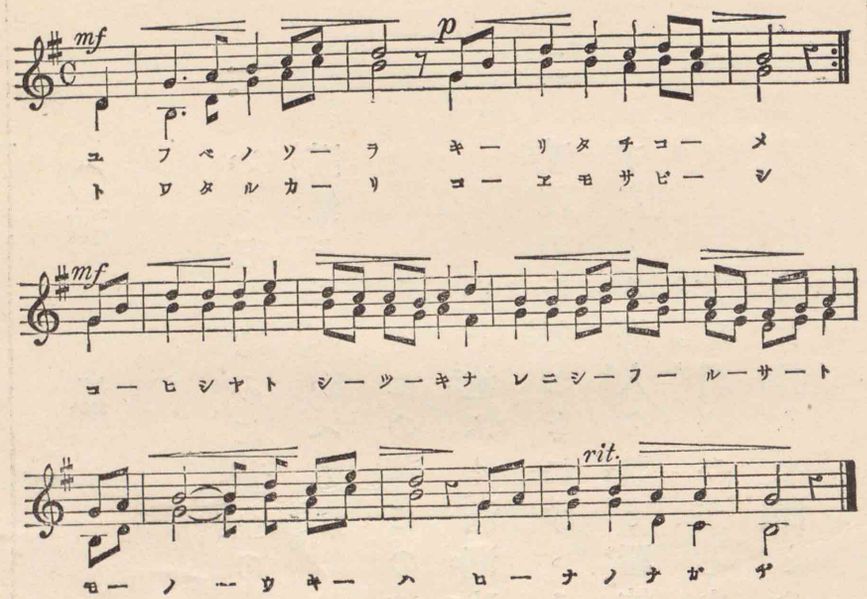


○旅の暮

三輪義方作歌

ゆふべの空、きりたちこめ。
とわたるかり、聲もさびし。
戀しやとし月、なれにしふるさと。
ものうきは、ひなのながぢ。

旅の暮



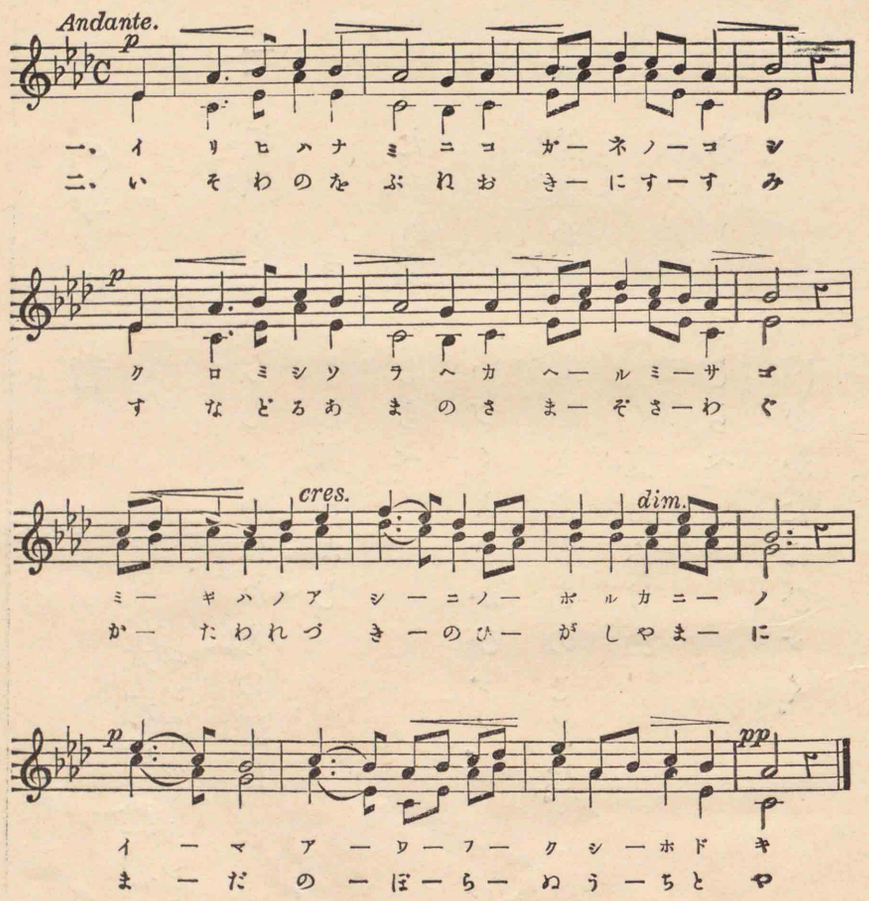
○秋　漁

旗野十一郎作歌

一、いり日はなみに、黄金のこし。
黯然そらへ、かへる鶻。
みぎはの芦に、のぼる蟹の。
いま泡ふく、滿潮時。』

二、磯囘のを船。おきにすゝみ。
すなどる海人の、狀ぞ騷忙。
片割月の、ひがし山に。
まだ昇らぬ間とや。』

秋　漁



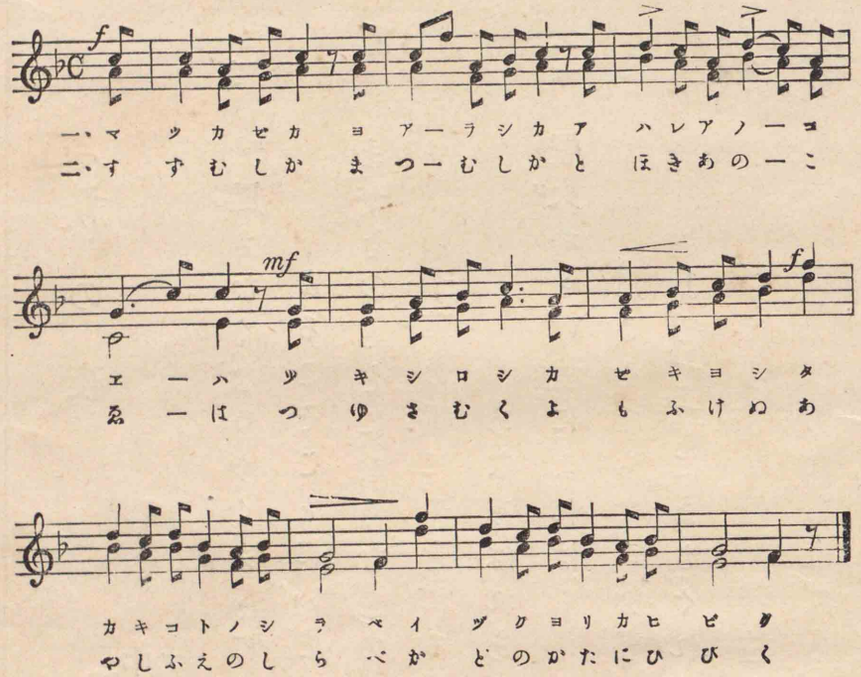
○琴の音

大和田建樹作歌
メンデルソーン作曲

一、松風か、夜あらしか。あはれあの聲は。
　　月しろし、風きよし。
　　たかき琴のしらべ。
　　いづくよりかひゞく。

二、鈴蟲か、松むしか。とほきあのころは。
　　露さむく、夜もふけぬ。
　　あやし笛のしらべ。
　　門のかたにひゞく。

琴の音



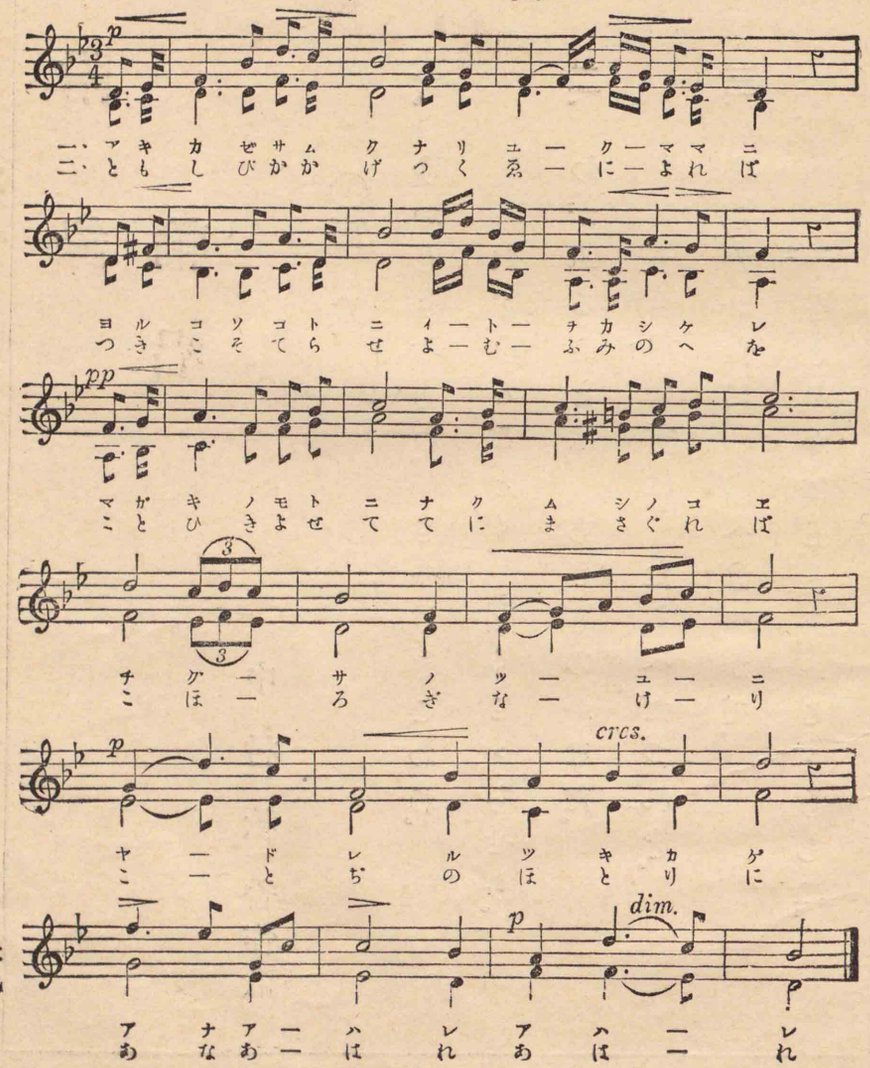
○秋の夜

中村秋香作歌
アプト作曲

一、秋風さむく、なりゆくまゝに。
よるこそことに、いとをかしけれ。
まがきのもとに、なくむしのこゑ。
千草の露に、やどれる月かげ。
あなあはれ、あはれ。』

二、燈火かゝげ、机によれば
月こそてらせ、よむ書の上を。
琴引きよせて、手にまさぐれば。
こほろぎなけり、琴柱のほとりに。
あなあはれ、あはれ。』

秋の夜



附錄

輪唱

中村秋香作歌

○寫眞

一、ゆかしきおもわ、さやけきこわね。
　たゞみるごとく、聞くこゝちせり。

二、わがふるさとは、ちさとのかなた。
　五百重の雲は、たちへだつれど。

三、今このかたに、向へばやがて。
　手をとりかはし、あふこゝちしぬ。

四、うれしのかたや、このかたこそは。
　あけくれさらぬ、わが窓のとも。

○花紅葉

一、ゆきて見ばや、さける、山の、櫻の花。
　サもろともに、袖つれて、いざや。

二、いざや、おもふどちよ、時は、たがひやすし。
　サあめ風に、うつろはぬ、ひまに。

三、ゆきてめでん、にほふ、のべの、もみぢの色。
　サこれかれを、いざなひて、いざや。

四、いざや、おぼしたてよ、時は、人をまたず。

サつゆしもに、ちりそめぬ、ほどに。

○兄弟

一、わが父母が、身體を分ちし。
　わが身はやがても、わがはらからの身。

二、わがはらからも、又ちゝはゝより。
　身體を分ちて、生れし身なれば。

三、さてこそわれは、やがてもはらから。
　はらからやがても、ちゝはゝなりけれ。

四、たふときものは、はらからなるかな。
　したしきものこそ、はらからなりけれ。

○夜學

一、軒ばの柳に、月かたぶきて。
　書よむともしび、影またたけり。

二、しづまりはてにし、ちまたのかなた。
　はるかにきこゆる、遠吠のこゑ。

三、今宵もいつしか、一時をすぎぬ。
　この一まきだに、まだよみはてゞ。

○四季のあけぼの

一、花さく、春のやま。
　梢より、ほの〳〵、しらめる、あけぼの。

鳴たつ、秋の澤。

芦間より、やう〳〵、くれゆく夕ぐれ。

ああ、なにとか、ああ、うたはん。

ああ、なにとか、うたはん。

二、ふみよむ、なつのつき。

をすの外に、そよ〳〵、ふきくる朝風。

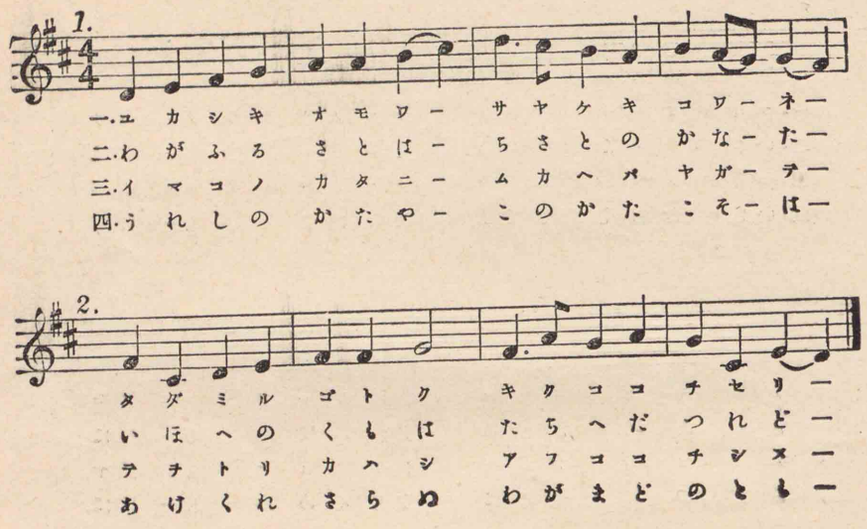
筆とる、冬のまど。

笹の葉に、さら〳〵、ふりくるはつゆき。

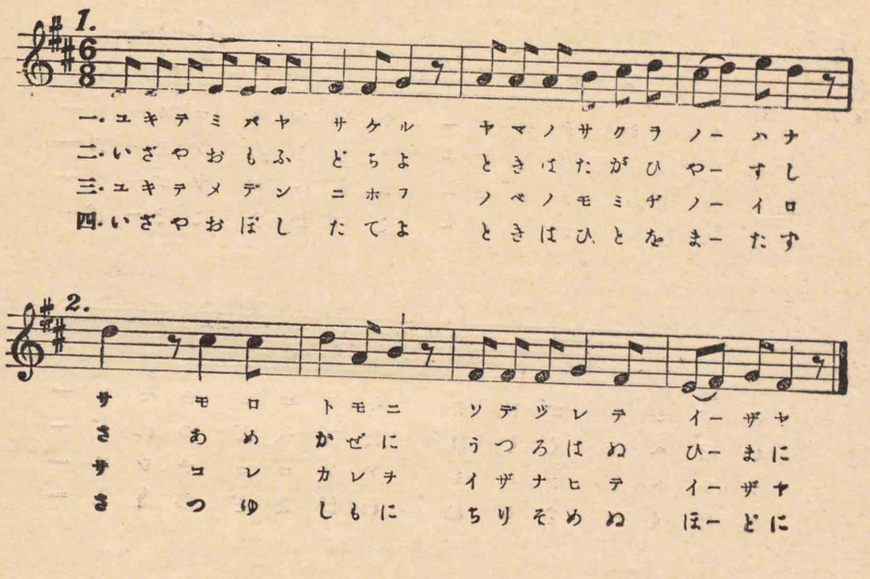
ああ、いかにか、ああ、いふべき。

ああ、いかにか、いふべき。

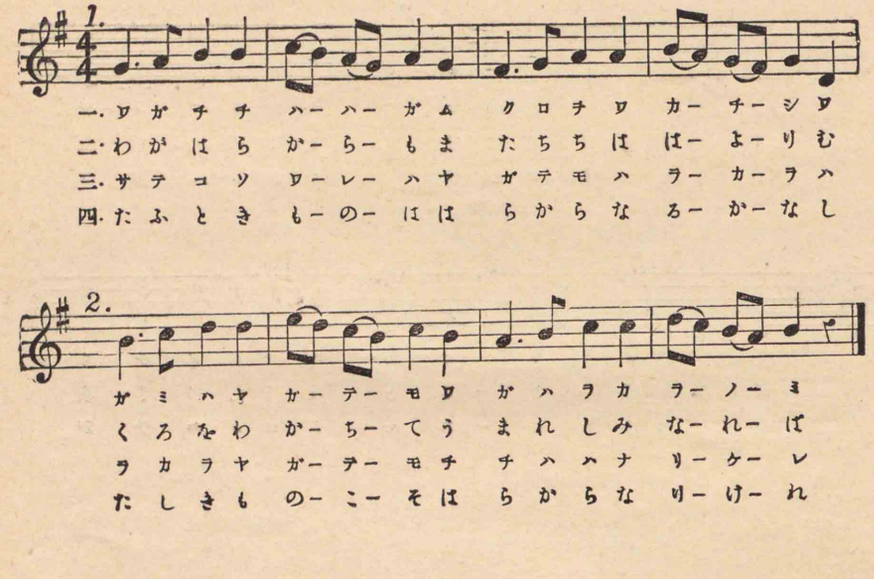
寫眞



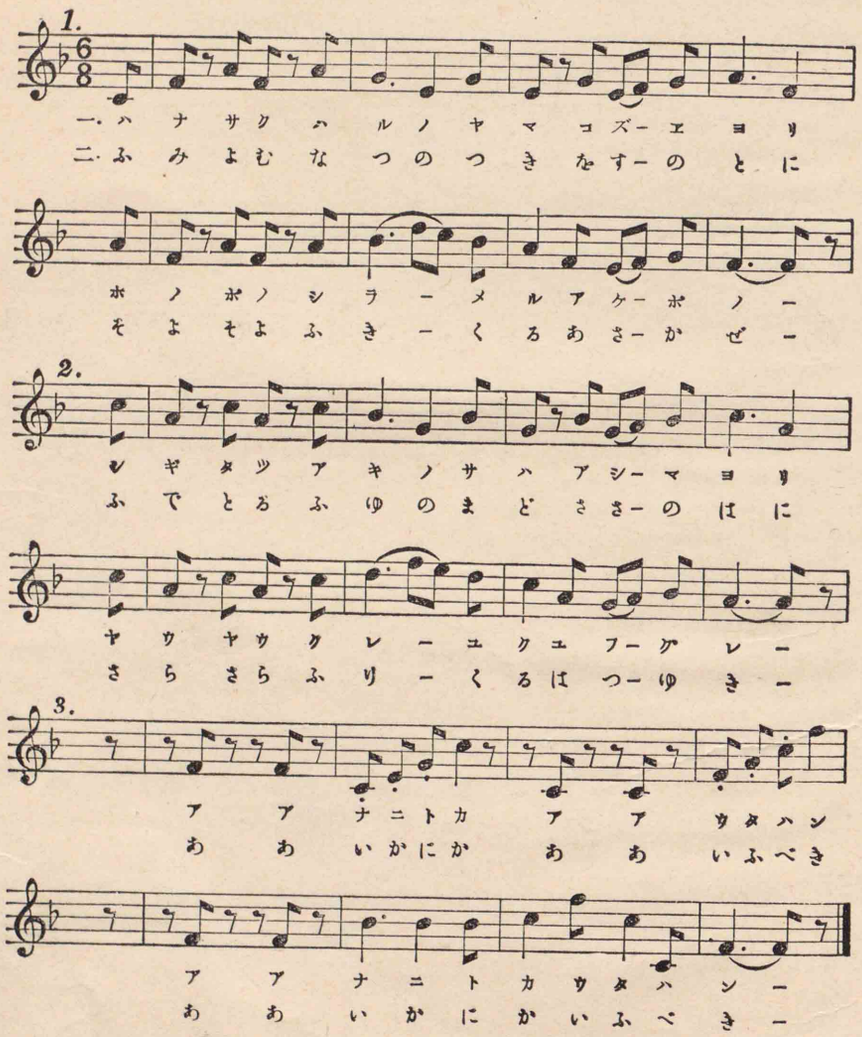
花紅葉


1.
一.ユキテミヤ サケル ヤマノサクラノ ハナ
二.いざやおもふ どちよ ときはたがひやー すし
三.ユキテメデン ニホフ ノベノモミヂノ イロ
四.いざやおぼし たてよ ときはひとをまー たず
2.
サ モロ トモニ ソデツレテ イーザヤ
サ モ ロ ト モ ニ ソ デ ツ レ テ イ ー ザ ヤ
サ あ め か ぜ デ ろ ぬ ひ ま に
サ コ レ レ ス ナ テ ー ザ ヤ
サ つ ゆ し も リ そ ぬ ー ど に

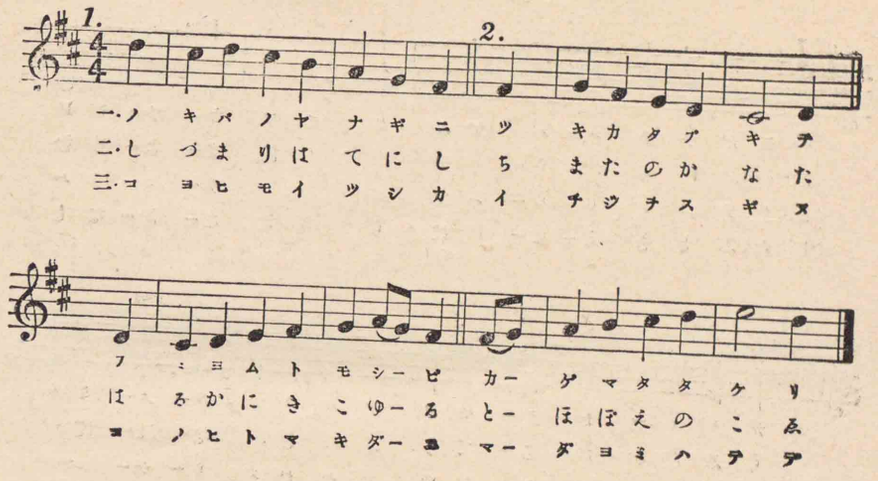
兄弟


1.
一.ワガチチ ハーハーガム クロチワ カーチーシワ
二.わがはら かーらーもま たちちは はーよーりむ
三.サテコソ ワーレーハヤ ガテモハ ラーカーラハ
四.たふとき もーのーはは らからな るーかーなし
2.
ガミハヤ カーテーモワ ガハラカ ラーノーミ
くろをわ かーちーてう まれしみ なーれーば
ミろかし ハをラき ヤわヤも
ガくラた

四季のあはれ


1.
一.ハナサクハルノヤマコズーエヨリ
二.ふみよむなつのつきをすーのとに
ホノボノシラーメルアケーボノー
そよそよふきーくるあさーかぜー
2.
レギタツアキノサハアシーマヨリ
ふでとるふゆのまどささーのはに
ヤウヤウクレーユクユフーグレー
さらさらふりーくるはつーゆきー
3.
アアナニトカアアウタハン
ああいかにかあああいふべき
アアナニトカウタハンー
ああいかにかいふべきー

夜學


1.
2.
一.ノキバノヤナギニツキカタブキテ
二.しづまりはてにしちまたのかなた
三.コヨヒモイツシカイチジチスギヌ
フミヨムトモシービカーゲマタタケリ
はるかにきこゆーるとーほほえのこゑ
ヨノヒトマキダーヨマーダヨミハテア

明治三十三年八月十五日印刷
明治三十三年八月十九日發行
明治三十八年五月十七日七版印刷
明治三十八年五月二十日七版發行
明治三十九年十月二十日九刷

定價金五拾錢

著作權所有

編者　東京市小石川區白山御殿町百十番地　山田源一郎

發行者　東京市京橋區竹川町十三番地　白井直

印刷者　東京市京橋區築地三丁目十五番地　野村宗十郎

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

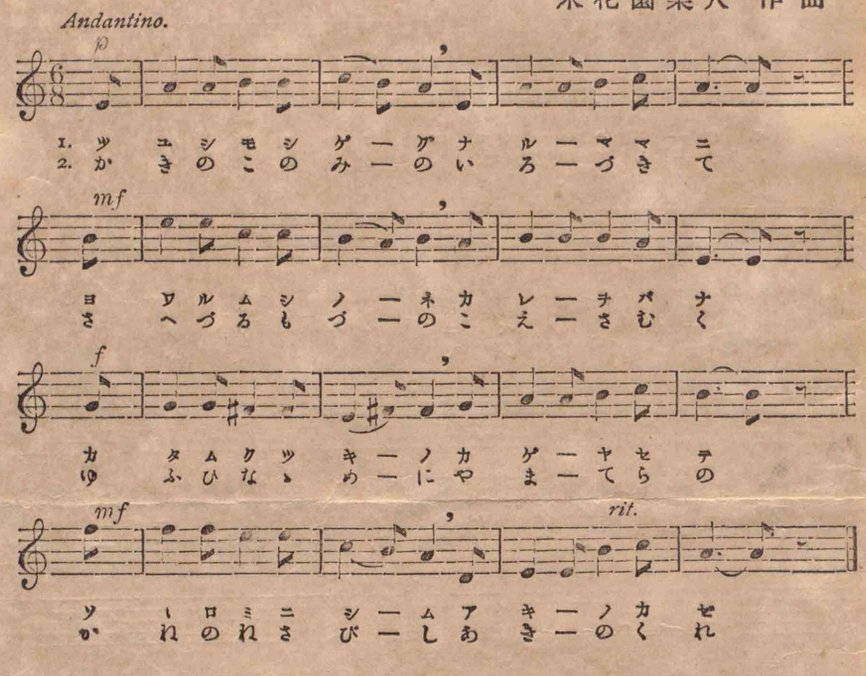
發行所　東京市京橋區竹川町十三番地　合資會社共益商社樂器店
（電話番號新橋五百廿九番）

1980.1.2

岡山縣女子

晩　秋

米花園樂人　作曲



晩　秋

西山實和作歌

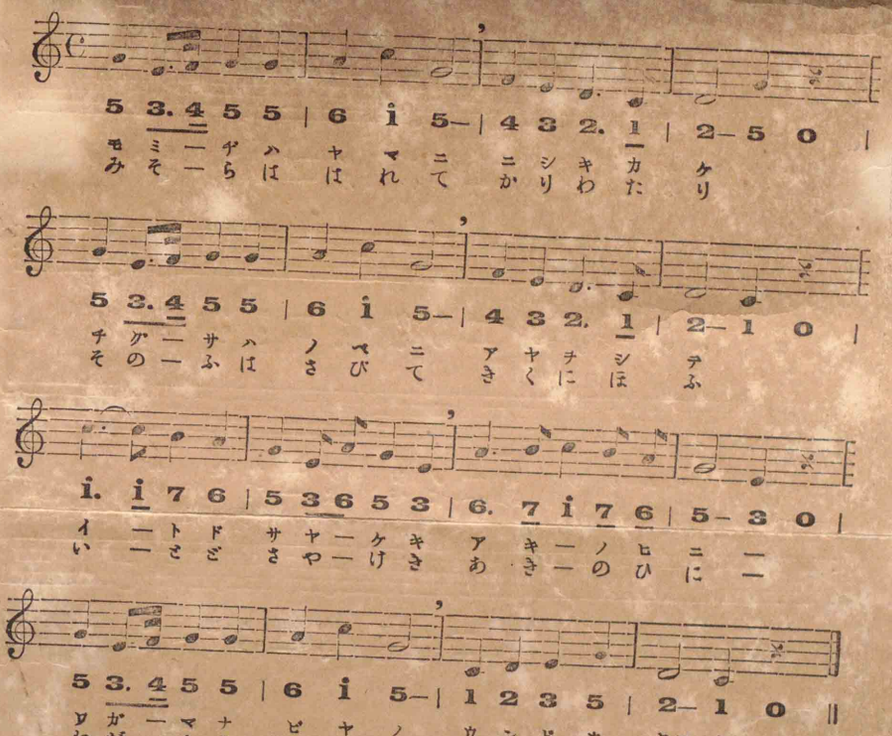
一

露霜繁くなるまゝに、
弱る虫の音枯尾花、
傾く月の影痩せて、
そゞろ身にしむ秋の風、

二

柿の木の實の色附きて、
囀る百舌鳥の聲寒く、
夕日斜に山寺の、
鐘の音淋し秋の暮、

ハ調四分の四拍子



運動會

秋葉小雨作歌

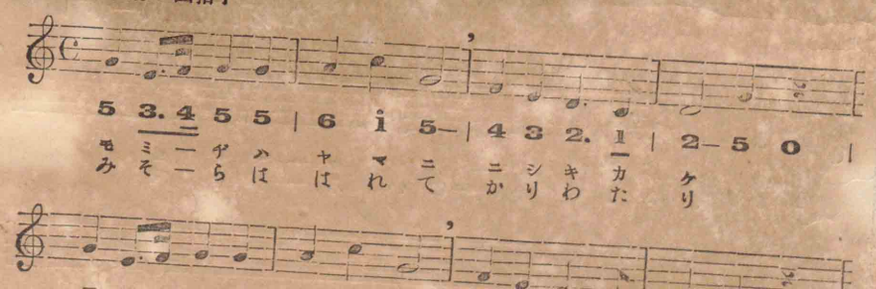
(一)

紅葉は山に錦かけ
千草は野邊に綾をして
いとゞさやけき秋の日に
我が學び屋の運動會

(二)

美空は晴れて雁わたり
園生は幽びて菊にほふ
いとゞさやけき秋の日に
我が學び屋の運動會

ハ調四分の四拍子



広島大学図書
0130449460